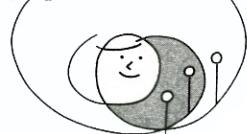


社会保障

ゆうゆうLife



ただ、しなければならないことはじくなる前から決まつていました。夫は自分の死後、私が困らないよう、お世話になつた方々に感謝を伝えられるように葬儀を含め、全てをプロデュースしました。私は通夜から四十九日までを代行し、遺作となる著書の出版作業を引き継ぎました。

續
け
た

緩和ケアで、体の痛みや強烈な副作用はある程度コントロールできるようになります。ただ、「死の恐怖」と向きあう心の痛み「スピリチュアルペイン」はどうしようもなかった。病気を隠して闘病を続けたことで、夫は最後まで社会との繋がりを持ち続けた。

に繋がる血管をふきぎり、腫瘍を壊死させる治療で、肺の腫瘍は9センチから3センチまで小さくなつた。しかし、1年後に状態が悪化。自宅で療養しながら、死の前日まで電話取材を受け、執筆を



夫の終末期を在宅で
社会との繋がりが支え

「ミニナル・ネットワーク」を始めました。死に直面した人の痛み、周囲の人の苦しみに寄り添いたい。死は「無」ではなく、「死ぬ」とこと生きることとは同義だと伝えていければと思っています。

在を死後も感じ続けている」とです。私も「周忌の準備を始めると、「さあ、祭りの準備が始まった。夫が動き始めた」と思ったほどです。

末期の肺カルチノイド（肺癌の一型）と診断されて5
〇〇日。平成24年10月、41歳
の若さで亡くなつた流通ジャ
ーナリスト、金子哲雄さん
を、妻の金子稚子さんは在宅
で支え続けた。哲雄さんから
全幅の信頼を寄せられ、「死
ぬことは生きる」と同義
と言い切るまで生と死を見つ
め続けた稚子さんは、今も傍
らに夫の存在を感じている。

悲しみに沈み込みそうになると、「今の自分を夫はどう思うか」と考え、書く作業や瞑想で、悲しみや怒りを客観視することで切り離すことができました。おかしな言い方ですが、「死は終わりではない」「夫はいつも私のそばにい

「スピードで立ち上がる」ことが
できるようになった気がします。

40日間で死と向きあう心の痛みからも解放されたと思います。死と向きあうのは、とてもしない苦痛です。多くの人は目標を定め、それに向かって努力するのが人生だと学んできた。でも、「死」はこれまで受けた教育や知識を使って使つても答えがない難問。「死とは何か」「死んだらどうなるのか」をどんなに語つても誰も答えを持つていない。哲学や宗教に一定の答えがあつたとしても、本当の意味で自分が腑に落ちないと、苦しみから逃れられない。家族であつても周囲の人ができることはありません。

金子の助になつたのは仕事とともに、在宅治療を支えた医療者、そして宗教家との出会いがあると思います。かかりつけ医はどんな方にも必要です。自分のことを分かってくれる、人間同士のおつきあいができる医師を見つけておくことです。私たち夫婦間では特に宗派はありませんでしたが、浄土宗のご住職との分け隔てない会話を通じ、人生における最後の難問（死）に向かう勇気をいただきました。「こんなにぎりぎりに、こんなにすばらしい出会いがある。人生はすばらしい」と夫は言つっていました。東京タワーの麓で通夜、葬儀、納骨を生前にお願いし、ご縁をい

たたにた」とに感謝をしていました。

流通ジャーナリスト、金子哲雄さんの妻 金子稚子さん(46)

向 き 合 て

〈かねこ・わかこ〉昭和42年、静岡県生まれ。出版社勤務後、フリーランスのライター兼編集者、広告制作会社役員などを経て、「ライフ・ターミナル・ネットワーク」代表。金子哲雄さんの遺作

『僕の死に方—エンディングダイアリー 500 日』（小学館）を引き継ぎ、出版。単著に『死後のプロデュース』（PHP研究所）『金子哲雄の妻の生き方—夫を見取った 500 日』（小学館）。